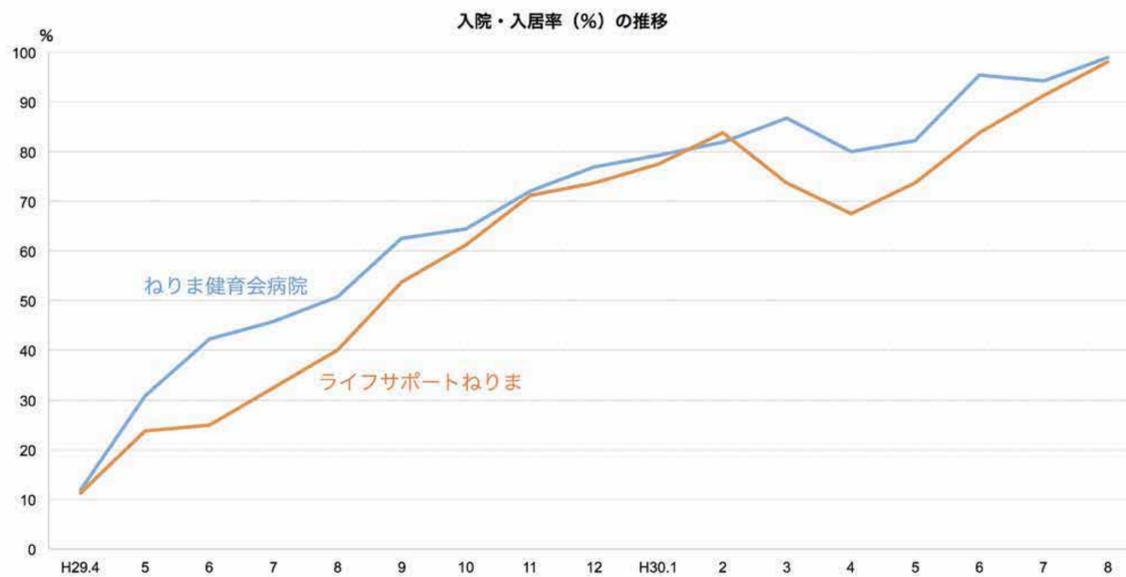


## ねりま健育会病院は 8月下旬に満床達成予定です。

医療法人社団 健育会 理事長 竹川 節男



「ねりま健育会病院/ライフサポートねりま」は2017年4月1日に開院し、今月で1年4カ月が経ちました。そのような中、2018年8月下旬に「ねりま健育会病院」が満床を達成予定となり、「ライフサポートねりま」も9月の上旬には満床達成の予定との嬉しい報告を受けました。



満床というのは、地域からこの病院と老健が求められていることの証であり、患者さんをご紹介くださった近隣の医療機関の皆様をはじめ各方面からのご支援・ご協力、そして何より職員たちの頑張りがあったからこそです。このような結果が得られた理由について、酒向院長兼施設長、矢吹マネージングディレクター、野口事務長に、話を聞きました。





### Q. 満床達成の要因は？

満床達成には3つのポイントがあると考えています。3つとは「スタッフの数」「スタッフの質」そして「地域の病院からの信頼」です。

一つ目の「スタッフの数」については、現時点で運用していく上での人員数は揃っていますが、実際はギリギリの状況ですので、もう少し増やしたいと考えています。特にリハビリスタッフについては、増強していかなければならないと考えています。

二つ目の「スタッフの質」については、開院からまだ1年4ヶ月ということもありまだまだ発展途上だと思います。その質を上げていくために大切なのは教育です。新入職員に対して、竹川理事長が新社会人に自らの口で理念をご説明されるように、私も新しく職員が入所する際には、必ず大泉学園複合施設で目指す姿について直接お話しさせてもらっています。

特に、大泉学園複合施設では、患者さんが退院してそれでおしまいではないと考えていますので、入院中から「退院後にどのような形で社会に参加・貢献していただき、残りの人生を人間らしく過ごしていただくか、そのためにはどのような支援が必要か」という退院後のより良い生活を思い描きながら、入院中の時間をどのようにお過ごしいただくかをイメージすることが大切だと考えています。現状でそこまで考えながら、全ての職員が看護やリハを行うことができているかというと、それはなかなか難しい状況だと思います。

現在、職員には実際に私と患者さんの間に入りながら学んでもらっている状況です。幸いにも面接時から人材の選定を厳しく行っているということもあり、職員の定着率はとてもよく、そういう意味では勉強したことを着実に蓄積していける環境であると感じています。現在働いている職員が3年をめどに力をつけて、他の職員を指導できる人材に育ってくれれば、自ずとスタッフの質は全体的に向上していくと考えています。

三つ目の「地域からの信頼」は、徐々に地域からの評価が上がってきていることを実感しています。例えば地域の開業医の先生方のご両親が調子が悪くなって入院されるということもあったのですが、実際に当院で良くなって行く過程をご覧になられて、その後に実感を含めて我々の病院を患者さんにご紹介くださるという例もありました。また、急性期病院からのご紹介の場合も、きちんと治療をして回復する患者さんの姿をご覧いただくことで信頼を得てきていると感じています。



### Q. 老健の運営については？

老健においては、「超強化型在宅復帰支援施設」として認められた「家に帰るための老健」として、3ヶ月で自宅に戻ることを目指して運用しています。そのため一般的な老健よりもご利用者の入れ替わりが早くなり、その分スタッフの日々のオペレーションで求められているものは多くなっています。ただこれも、しっかりと経験を積んでいくことで職員のレベルが上がり、対応できるようになっていくでしょう。

### Q. 今後の目標は？

自己採点では「スタッフの数」「スタッフの質」そして「地元の病院からの信頼」の3つのポイントとも、100点満点には達しておらずせいぜい75点くらいだと思いますが、それはこの病院・老健がさらに成長するための伸び代だと考えています。開院1年4ヶ月で満床という目標をクリアし、次の目標は開院3年の2020年で「日本トップレベルの回復期」「日本を代表する老健」に成長させたいと考えています。ホテルで言えばリッツ・カールトンホテルのイメージです（笑）。理想の姿を実現するためにさらに高い次元を目指していきたいと思っています。

## 矢吹マネージングディレクター（ねりま健育会病院）

---



### Q. マネージングディレクターとしての満床についての苦労は？

ねりま健育会病院は2017年4月に50床でオープンし、同年8月に100床での運用となりました。当初は右肩上がり入院患者さんの数が増えました。95%を超えるあたりから、病室の空き状況と入院をご希望の患者さんの状況が合わない場合が出てきたり、また当院では急性期後の重症度の高い患者さんを早期で受け入れリハビリを行うため、急な病状の悪化によって急性期病院へ戻るようなことも往々にして起こるため調整が難しく、満床達成までには少し時間を要しましたが、8月最終週には達成することができそうです。

### Q. 今後への課題は？

酒向先生のお話の中にもありましたが、職員のレベルアップがこれからの大きな課題だと思います。現時点では特に医療ソーシャルワーカーと事務職のレベルアップを目指していきたいと考えています。

## 野口事務長（ライフサポートねりま）

---

### Q. 事務長に就任しての老健の印象は？

私は今年の3月に赴任しましたが、ちょうど介護報酬改定のタイミングとなり、介護老人保健施設向けの説明会に出ました。その際に、「これからの老健は、地域包括ケアの中心となるべき施設である」と説明を受けたのですが、当施設は開設当初からその考えで運営されており、素晴らしいと感じています。また一般的な介護老人保健施設と比べると、現状でも医療処置の多いご利用者が多い状況となっておりますが、これは複合施設で病院が併設されており、そのようなご利用者も受け入れることができるというライフサポートねりまの最大の強みであると感じています。

### Q. 今後の目標は？

運営的には、最初は予算に対してマイナスからのスタートでしたが、現在は立てた予算をしっかりとクリアするペースになって来ています。今年度中に黒字化を目指して行きたいと考えています。

以上、3人の話をご紹介しましたが、グループの職員の皆さんも学ぶところがあるのではないのでしょうか。



私自身もエム・イー振興協会から出版されている「最新」と「最先端」をキーワードとして医療情報システムの最新情報を紹介する医療専門誌「月刊 新医療 2018年7月号」において、「回復期リハビリテーション病院・介護老人保健施設を合築の臨床上・運用上のメリット ケーススタディ大泉学園複合施設」として、そのメリットの詳細を以下のように論文として報告しました。



## 要約

### 回復期リハビリテーション病院・介護老人保健施設合築の臨床上・運用上のメリット ケーススタディ 大泉学園複合施設

#### ■ 健育会グループとは

- ・健育会グループは、1953年に初代理事長 竹川 不二男が開設した竹川病院（東京都板橋区）からはじまり、今年で創立65周年を迎えるグループである。
- ・初代理事長は、リハビリテーションという言葉がまだ一般化していない1965年に、今でいう急性期の治療を終えた方が元気な身体を取り戻すために、温泉を活用しながらより専門的で集中的なリハビリテーションが可能な病院を目指してグループで2つ目の病院となる熱川温泉病院（静岡県賀茂郡）を開院した。その精神を受け継ぎ、健育会グループではリハビリテーションに強みを持った病院・施設が多い。
- ・2017年4月、東京都練馬区に開院した大泉学園複合施設 ねりま健育会病院／介護老人保健施設ライフサポートねりまもその一つである。健育会グループにとって病院と介護老人保健施設が建物を一つにする複合施設は初めての試みとなったが、開院後1年を迎え、その優位性が見えてきたため報告する。

#### ■ 複合施設の経緯

- ・2013年に練馬区として正式に「練馬区内に回復期リハビリテーションの病院、そして介護老人保健施設が少ないため、それらの運営実績のある健育会にぜひ整備を進めてもらえないか」というお声がけを頂いた。
- ・その後、建設にふさわしい土地を練馬区からご紹介いただき、協議を重ね、約1年の工期を経て、2017年4月に開院となった。

#### ■ 複合施設の特徴

- ・建物においては、奥行きが広い建物の構造（写真1）を生かし、歩くりハビリを行うための100m廊下（写真2）を配していることが特徴である。
- ・また建物の周辺とガーデンには365日いつもどこかに花が咲くように植栽に配慮する（写真3、4）など、建物全体で歩くりハビリを促すよう工夫を行っている。
- ・きめ細やかな医療管理のもと、脳画像を元に損傷された領域を把握し、障害を受けた機能と残存する機能を見出して患者さんの能力の限界までリハビリを行う「攻めのリハビリ」が、病院の特徴となっている。
- ・老健においては、2018年度介護報酬改定における在宅「超強化型」を目指しており、在宅復帰のための老健であることを明確に打ち出している。



写真1：建物外観  
奥行きが広い構造となっている。



写真2：100m廊下  
2.5m間隔でラインを入れてあり、生活リハビリや自主トレーニングの際に距離が分かり易いように工夫している。



写真3：ガーデン  
四季折々の花や果実の鑑賞、散歩ができる。地域の方にもお越しいただけるよう、開放している。



写真4：敷地内植物マップ  
一年365日、いつもどこかに花が咲いているというコンセプトで34種類の花を植えており、リハビリを促している。

#### ■ 複合施設の臨床上のメリット

##### (1) 老健からの視点

- ・専門的な治療が行える病院が同じ建物にあり、医療的な基盤がしっかりとあるからこそ、どのような疾患を抱えるご利用者であっても、全身をしっかりと管理して在宅復帰に結びつけることが可能となっている。
- ・老人介護保険施設において個別リハビリは1日30分と制約があるが、その中においても我々の老健はリハビリテーション専門医と専門職チームによる質の高い濃密なリハビリを行うことが可能である。

##### (2) 病院からの視点

- ・一般的に入院した患者さんを退院後も継続的に担当させていただく場合、外来リハビリを活用してもなお、その状態が徐々に悪くなることは往々にして起こることであるが、そのような時に我々の複合施設においては老健を活用し、リハビリテーションを実施して基礎体力を回復させ、生活リズムを立て直すことで、再び患者さんを家に戻すことが可能である。
- ・病院は老健を持つことで「超高齢社会に対応できる」という強みを持つことができる。

#### ■ 複合施設の運用上のメリット

##### (1) 教育面

- ・病院と老健の垣根をなくし、同じ次元で教育を行うことで、質の高い教育の機会を、全ての職員に与えることができている。
- ・病院と老健で人事ローテーションを行い、職員がそれぞれの特徴を理解することで、一体感を持った複合施設の運用を行うことができている。

##### (2) 事務管理面

- ・病院と老健が同じ建物内にあることによって、同一の作業をまとめることができるというメリットがある。
- ・厨房については病院と老健が一つの給食設備で食事を作っているため、メニュー面での工夫はもちろん必要であるが、作業面においてもコスト面においても非常に効率的な運用が行われている。

健育会グループ病院・施設においても大泉学園複合施設からのいい刺激を受け、さらに地域との連携を強化し、その地域において必要とされる病院・施設としてしっかりと役割を果たし、地域医療・介護の発展に貢献してもらいたいと考えています。